

(2) 挨拶

第五世代コンピュータ国際会議実行委員会
委員長 元岡 達
(東京大学工学部教授)

お早うございます。

実行委員会を代表いたしまして、本日、多数の方々にお集まりいただきましたことに対して心より感謝申し上げます。

願いますと、3年前、1981年10月に第1回五世代コンピュータ国際会議を開いたわけでございます。その時には、我々としては、第五世代コンピュータの開発に対する日本の計画をお話しして、そして、その推進について各国で共同して進めていきたいということをお願いしたつもりでございました。幸いにして、各国の方々のご協力を得まして、それぞれの国に類似のプロジェクトが続々と誕生して今日に至っているわけでございます。

我が国におきましても、先ほど、片山理事長からお話がありましたように、ICOTが、その翌年の4月に発足いたしました。予定どおり10年計画の日本における第五世代コンピュータ・プロジェクトの前期の研究がスタートし、そして2か年半を経過したわけであります。

今回の第2回FGCS'84の国際会議におきましては、前期2年半の間にICOTを中心として行ないました我が国における研究開発の状況を皆様にご報告して、いろいろご意見を承りたいと考えております。それと同時に、各国の数多くの研究者が、これに関連した研究をなさっているわけでございまして、そういう研究の発表を後半にさせていただいて、お互いに情報を交換し、啓蒙し合うということに、この場を利用していただきたいと考えているわけであります。その他にも、次週は、ICOT研究所のオープンハウスを計画しておりますし、この会場内ロビーでは、プサイ

(PSI)と呼びます、我々がこれからの研究開発に使うための道具と考えておりますコンピュータを使ったデモンストレーションも予定しておりますので、そういうものも参考にさせていただきたいと思っております。

3年前、私が、FGCS'84の国際会議が終わる時にこのプロジェクトを知識世界におけるスペースシャトルを作るプロジェクトにしたいということをお願いしました。その時に、私が考えておりましたことは、スペースシャトルというのは、ただ単に宇宙へ飛んで行って探検をするためだけのものではなくて、そういうことを経済的に行なう1つのツールを提供することであるということ、それから、その上で新しいいろいろな未知の研究が数多くなされるんだということを頭において申し上げたつもりなわけでございます。そのことと、それから、この第五世代コンピュータ・プロジェクトを国際協力のもとで推進していきたいということを、もう一度、今の立場で考え直してみたいと思っております。世の中にはお互いに競争しないと力がでないような人達も沢山おられて、単なる協力ではなくて、Cooperation through Competitionというようなことの方が、よりアクティビティを引き出せるような感じがございます。

したがって、知識社会におけるスペースシャトルを作るための競争をするということも非常に大事なことでありまして決してコンペティションというものを否定するつもりはございません。

しかしながら、知識の世界の中には、まったく我々にとって未知の部分が数多くあるわけでございまして、やるべきことは沢山ある訳です。スベ

スシャトルの上で行なうべき数多くの実験、たとえば、宇宙基地を作って、その上でいろいろな実験をやる事が考えられているわけですが、この第五世代コンピュータを考えた場合にも、それを使った数多くの応用分野というのがあって、それぞれ各国に限らず個人個人でもいいと思うんですけども、個人個人がそれぞれ自分の得意とするところを分担してやっていくということも大切だと考えています。そういうことをとおしての協力というのが、あまりコンペティションを意識しないでできる協力ではないかと思っております。

私などは、どうもコンペティションということを意識すると、逆にあんまり仕事をしたくなくなる方でございまして、そういう人達も世の中にはいると思います。そういう人達にも自ら新しい研究のフィールドというものを見つけだすための広い世界がまだ残されているということを、この機会に皆様に訴えたいと思います。

終わりにあたりまして、多数の方々に参加していただき、実行委員長として、心から感謝しております。

この4日間、一つ、十分お互いに議論をすることをとおしまして、この会議をますます意義のあるものとしていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。